瞳に宿りし運命

メルクリウスだけど非売品

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瞳に宿りし運命

【Ｎコード】
Ｎ４０２６Ｊ

【作者名】
メルクリウスだけど非売品

【あらすじ】
瞳に宿りし力と運命に翻弄されつつも類稀なる適応能力でお気楽に日常を送る主人公！
チートスキル持ち。ときどきシリアス。ラブあり。異世界で主人公を待ち受けるものとは！？

第０話・運命の宿りし刻（前書き）

ちょっと設定が似てるとか影響をもろに受けたとかはありますが一応オリジナル。
主人公チートスキルもちでハーレム（になるかも？）なのでそれに嫌悪する人は周れ右。

第0話・運命の宿りし刻

「うぅ、あ……あぁぁぁっぁ！！！！」

現実は、あっけなく崩れ去った。
今までの常識が壊されていき、奈落の底に堕ちていくような錯覚を受ける。

目を直接突き刺されたような激痛に悶える俺を、やつらは愛おしそうに見つめている。この激痛を与えたのはやつらだが、その顔には心配そうな、そして嬉しそうな。矛盾していそうだが、おおよそ“敵”に見せるような感情ではなかった。

だが俺はそんなことに構っていられず目を押さえる。痛みと疼きが交互に流れ込み、両目から涙がこぼれる。もう目が焼けてしまいそうだった。痛みと疼きで脳がパンクし、本当に落ちていくような……

（なんで、こんなことになったんだっけ――？）

記憶を掘り返そうとして、しかし叶わず。そのまま気を失った……

第０話・運命の宿りし刻（後書き）

初投稿です。感想が更新の糧になると思うので、ばんばん書いてくださいな。
また大まかなシナリオすら書いていないので、読者の要望にもこたえる予定です。

第1話・異世界

チチチッ……チチチッ……

「うぅ～ん」

鳥のさえずる音に誘われ、目が覚める。

「……。ここは、どこだ？」

辺りを見渡すとどうやら森の中で寝ていたらしい。よく風邪ひかなかったな……

「さて、どうして俺はここで寝てたんだ？」

まったく記憶にない。というか昨日の記憶がない。

「おいおい……記憶喪失なんて笑えねえよ……」

頭でも打ったのだろうか。それにしてもなんで森の中にいるのやら。

「さ～て。とりあえず森から出ますか。……近くに森なんてあったか？」

記憶の限りでは家の近くどころか、こんな森なんてなかったはずだが。

……歩くこと２０分。ようやく開けたところに出た。が、

「どこだここ？」

レンガで造られた家や馬小屋。どう見ても人間に見えない人たち。
果てには小型のドラゴンらしきものもいる。

「おいおい。ここはどこのファンタジーですか！？」

絶叫した後後悔。だってみんなこっちめっちゃ見てるんだもん！
おいおい。どうするよ。みられるのがこんなに怖いって初めてだよ！！

「――――？」

「？？？　何言ってるか判らないのだが？」

ロシア語みたいな感じもするが多分違う。ってかおそらく、

「ここ、いわゆる異世界ですか！？」

ああ、お父様お母様。
俺、桜義人（さくらよしと）は異世界に来てしまったみたいです……

その後は大変だった。（いや、まあそれまでも大変だったけど）
兵士らしき人がわらわらくるし、槍とか剣とか突き付けられるし、
牢屋に入れられるし……

普通、テンプレなら好待遇じゃねえの？なんでこんな仕打ちなん？

目の前には見張りらしき兵士が2人。めっちゃにらんでます。怖いよ。

牢屋に入るまで色々な人たちを見ていたが、どうやら人間はいるようだ。
……耳がとんがってたりしてるけど。
人間だと信じたい。仲間がいないのってさびしいのさ！

「――――！」

おおぉ！飯だ！そして普通な飯だ！！
一番心配していた飯は普通だなんて！奇跡だ！

……パン（らしきもの）と具のないスープ（らしきもの）だけだが。

「まぁそりゃそうだろうなぁ……」

はぁ。何も悪いことしてないのに……
一体なんでこんな目に。

ズキッ！

どうしてこうなったのか思い出そうとするたび目が疼く。
だんだん疼きが強くなってるような気がして怖い。

「――――！？」

心配しているのだろうか？兵士がおろおろしている。

ああ、なんか安心。

「ありがとう、大丈夫だ」

分からないだろうけど、とりあえず礼をいう。

「そうか、ならいいんだが」

やっぱり心配してくれていたんだ……ってチョイ待て！！

「おい、お前！俺の言葉が分かるのか！？」

そう言うと兵士も気づいたようで、

「おっ、おう！急にしゃべれるようになったな！？ちょっと待ってろ。報告してくる！！」

そう言って駆け出して行った。

「なんで急に言葉が通用できたんだ？」

兵士が人を連れてくるまで、俺はその理由について考えていた……

第1話・異世界（後書き）

はい。こんにちは。小説って書き始めが大変だね！
誤字脱字があったり、感想があったらばんばん書いてください！
チートスキルはまだ先の話になるかも？

第2話・現状把握

釈放されたのちに通された取調室。けっきょく疑われてるのか？Why？

「さて、私の質問に答えてもらおう。虚偽・黙秘は認められない」

目の前にはいかめしいトカゲ男。なにこれ？俺犯罪者ですか？

「まずは名前を聞こうか」

「桜義人。さくら　よしと　だ」

「サクラヨシトか。聞いたこともないような名前だが？」

「えっと……日本って聞いたことありま……せんよね？」

「ニホン？ないな。……おい、こいつの頭に異常はなかったんだろうな？」

おい！ひでえな！確かに痛い発言かもしれないけど！！

「えっと、おそらくですが。異世界からきてしまったのかと……」

そう呟くとトカゲ男たちは目を見張る。あれ？地雷踏んだ？

「それは、本当か？」

「えっと。目が覚めたら森の中にいて。歩いてたらここに着いた。って状況からそう判断しました」

まず喋るトカゲ男なんて珍獣聞いたこともないし。なんてことは胸にしまう。だって怖いもん。

「……ふむ。嘘はついていない。精神に異状も見られない、か。分かった」

ほっ。理解してもらえたようだ。とりあえずは地雷じゃなかったっぽい。

「それでは別の質問だ。どうして異世界に来た」

「分からないんです。思い出そうとすると目が……」

こう言ってる間も目がずきずきする。目を抉り取りたくなるようなむず痒さ。

「ふむ。おい、検査器具をもってこい。…そうだ、あれだ。一応検査しておく」

あれ？あれって何よ？視力検査でもしてくれるのか？

少しすると部下らしき人がやはり視力検査で使うようなものを持ってきた。けど、

「視力を測るものですか？の割にはチープですけど……」

「視力？何を言ってるんだか。これは魔力測定機だ。……魔力とはわかるか？」

「ええ、おそらくは。ということは俺にも魔力が！？」

やったマジで！？もしかしてチートな能力ゲットってか！？
こう普通の１００倍とか、特殊属性持ちとか！？

というかなぜ目で測るんだ？

「魔術の行使は基本目からだからな。火を出すにしろ、水を出すにしろ。どこに出すか、を把握しておかないと発現すらしない。そのためか魔力は基本目に集中するんだ」

うおぉ～！勇者になれるのか！俺！いや、魔族とか言ってるから魔王か！

「……そのままでいろ」

「（ドキドキ……ワクワク……）」

ピピッ。

「……ないな」

「はっ？」

えっ？なんで？チートスキルはどこにいったの？？魔力１００倍Ｔ

ＵＥＥーーー！は？？

「まあ魔族じゃないみたいだから当たり前だったか。しまっていいぞ」

「えええ～！！なんでないんだよ！」

「だから魔族じゃないんだからだろう」

呆れた目で俺を見るな！夢見たっていいじゃないか！！

「しかしそうすると突然言葉が通じた理由がわからんな」

「あっ、それなら……」

と、こき使われていた部下が声を上げた。

「さっき牢屋で目を押さえてた後に言葉が通じるようになったので、もしかしたらそれに関係があるんじゃ？」

ナイス推理！ってことは目が痒くて開けられない状態になれば……

「……って、目開けられないじゃん！」

「そうだな。計測不能だ。あきらめろ」

ガガーン。理不尽すぎる……

「まあ目が関係していることが分かった。それでいい。……今日はここまでとする。こいつを部屋に戻せ」

うなだれる俺を抱えて牢屋に押し込む。部屋って牢屋なのかよ……

「不幸だぁ～！！！！！！」

かくして一日目は踏んだり蹴ったりで幕を閉じた……

第3話・王都へ（前書き）

むぅー。コメント何一つこないって悲しい……

第3話・王都へ

夜が明け、日の光の刺激により義人は目が覚めた。
牢屋の中で。

（牢屋って意外と寝心地悪くないのな……）

これは幸運なのだろうか？いや、牢屋にいる時点で不幸か？

と、寝ぼけた頭でつらつらと考え事をしていると、足音が目の前で止まったことに気付いた。

「義人、おきているか？」

「うぅ～ん。半分だけぇ」

この太陽の位置からするといつもより遅い目覚めだが、やはり疲れていたのだろうか？

（というか、時間とか日にちとかの概念違ってたら面倒だなぁ……）

「そうか。起きているなら客室まで連れてこいとのお達しだ。……寝てたらたたき起せともな」

そういうと兵士は不敵に笑い、まどろみを強制的に終わらせるべく……

「わかった！わかったから！起きました！！起きましたからその危ない棒をしまってください！」

とほほ……いったい何の用事なんだ……

「今日、王都にお前を連れていくことになった」

客室には昨日取り調べをしていた人（トカゲ人間だから人でいいよな？）がそうのたまった。

「へっ？」

「ちなみに拒否権はない。生活能力皆無だろうからな……」

まぁ、そうだけどさ……

なんでも所長さん（らしい）が言うには、異世界人は意外と“来る”らしく４０年～１００年に１人は来ているらしい。
原因は魔術師の禁術研究。邪神召喚とかそういった類の失敗で呼ばれてくるのだそうだ。
通常そういったものは死刑になるが、異世界人は知識という財産をもっているため国が抱えるようにしているらしい。

「いきなり死刑とか、いやすぎる……」

話が通じる異世界でよかった。

「お前には２つ選択ができる。１つはこの世界で知識を武器にのし上がっていくか。もう１つは知識と才能を武器にもとの世界に戻る方法を探すか、だ。だが、魔力がないから２つ目は難しいだろうな」

ってことはここで骨をうずめろってこと？マジで？しかも知識って……異世界系ノベルとか読んでて良かったと心から思う。

「わかりました。国の繁栄に全力を尽くします」

「うむ。よく判断した。それでは馬車で王都まで行く。３～４日かかるからその間常識をたたきこんでやる。覚悟しとけ？」

そうして俺は王都へと連行された（連行ってとこを注目……）

第3話・王都へ（後書き）

なかなかチートスキルが発動してくれません。
今のところ言語系のみです。
まぁ、文字も読める話せる。が出来れば上出来な気もしますが。

あと2～3話で戦闘系チートが出るかな？
稚拙な作品ですがお付き合いください。

第3．5話・常識（前書き）

この異世界の設定……もとい常識をまとめます。

第3．5話・常識

馬車にゆられて3日たった。がたごと揺れて体力を消費し、お尻が痛い今日この頃。
とりあえず常識を叩き込まれたので、それをまとめることにした。

月は6、日は30。5週間あって、風、水、土、闇、火、光のサイクルで進む。1（週）の風とか、3の土とか……時間は24時間らしい。前の異世界人が作ってくれたのだという。ありがとう！！

現在認められている種族は、魔族、ドワーフ（小人）、エルフ（妖精）、ドラゴン（幻想種）の4つだという。だが、他にもいるし、魔族の中でもまた色々な種族があるという。
また、この世界には魔物という生物がいるらしい。魔術師の研究の産物が自然繁殖してしまったものだと説明してくれたが……

国土的には魔族とドワーフが1国。エルフは森に引きこもり。ドラゴン種も山に引きこもり。近づくと怒るから近づかない。戦争はない。人間のように繁殖能力が高くないため領土も食糧も大量に消費しないからだそうだ。
だが、その代わり魔物の討伐が多い。ウルフ種からワイバーンからなんでもござれだ。それ専用のギルドもあるあしい。

魔族の中に、魔術を研究する魔術師というものがいて、生活の向上に一番貢献してくれている。が、魔術の暴走や禁術で一番被害を与えているのも魔術師というのだから笑えない。
ゆえに魔術師は人里を離れてひっそりと暮らしている。

・・・・・意外と常識に誤差がなかった。覚えるものが全くないというのも悲しいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4026j/

瞳に宿りし運命

2010年10月11日22時59分発行